

ここは山田錦のふるさと　―藤川禎次―

このところ、ちらほらと見かける、変な旗。田んぼのわきに、ぼつりぼつりと立てられています。

「お祭りは今ごろないし、なんやろ。」

不思議に思っていた由紀は、夕食のとき、おじいちゃんに聞いてみることにしました。

「おじいちゃん、田んぼのあぜに立つとる旗があつたんやけど、あれ何？」

お米を作っているおじいちゃんは、笑いながら、

「ああ、あれか。『〇〇契約田』とか『△△栽培田』とか書いてあつたやろ。あれはお酒をつくる会社の名前や。」

と、教えてくれました。

「なんでお酒の会社が、田んぼに旗を立てなあかんのか？」

「うちのお酒は、この田んぼのお米からつくりますという印や。」

「へえ、あそこのお米で、お酒をつくるんや。」

「この辺りでとれるお米は、酒米というてな。えらいひょうばんがええんや。だから、お酒をつくつとる会社が農家とけい約するんや。ほんで話がまとまったら、あの旗を立てるんや。」

「ふーん、そうなんや。」

由紀は、初めて聞く話に少しきょう味をもちました。

「田んぼなんかどこにでもあるのに、なんでわざわざここなんやろ。」

次の日、由紀は、先生におじいちゃんから聞いた話をしました。すると、先生は、

「それは、いいことを教えてもらったね。二学期になったら社会科で農家の仕事の勉強をするから、調べてみるとおもしろいね。」

と、アドバイスをしてくれました。

二学期になりました。由紀が旗を見つけた六月には、まだ短かったいねは、たくましく青々と育っていました。

由紀たちのグループでは、由紀がてい案して「酒米」について調べることになりました。

田んぼに行ったり、農家の人に話を聞いたり、グループで手分けをして調べてみると、その米は「山田錦」とよばれる地いきの特産物であることがわかりました。

さらに調べると、山田錦は、日本の酒米を代表する品種であることもわかりました。

「へえ、すごいやん。」

グループのみんなは自分たちの住む地いきで、そんなに有名なお米が作られていることにおどろきました。そして、この地いきは酒米のさいばいに向いていて、最も品しつの高い山田錦がしゅうかくされていることもわかってきました。

中でも由紀たちがきょう味をもったのは、そのすばらしい酒米の生みの親が、自分たちと同じ加東市の出身の「藤川禎次」という人だということです。グループでは、その生みの親について調べてみようということになり、由紀は酒米のことをよく知っているおじいちゃんに、取材することになりました。

その日の夕方、由紀はおじいちゃんに藤川さんのことを聞いてみました。

「ほう、よう調べたな。藤川さんまでたどりついたのは、さすがや。」

と、おじいちゃんがほめてくれました。そして山田錦たん生に関わった藤川さんの話をしてくれたのです。

藤川禎次さんは、今から百年以上前の一八九五（明治二十八）年に、加東市高岡（当時は加東郡滝野村）の農家に生まれたそうです。ところが、小さい時にお父さんもお母さんもなくなってしま

い、藤川さんは親せきの家で育てられることになりました。

「生まれた家とちがって、子どもながらに気をつかったり、米づくりの手伝いもしたりで、きつかったと思うで。」

と、おじいちゃんは言いました。

大人になって農業関係の仕事についた藤川さんは、加東市にあった酒米試験地の主になん研究員になりました。そこで、新しい酒米を完成させるという大役を引き受け、何年も何年も、昼夜を問わず、必死に研究しました。試験する田んぼまで、かた道二十キロメートルもある道のりを自転車で行き来していたそうです。

そして、ようやく完成した酒米は、一九三六（昭和十一）年、兵庫県によって、「山田錦」という名前がつけられました。さらに県のしゅうれい品種に指定されたのです。

「そりゃ、新しい品種を開発するのに一年や二年では無理やな。失敗にくじけんと、ねばり強う研究を続けたからこそ、すごい酒米を完成させることができたんや。」

おじいちゃんは、わたしに話すというより、一人語りのようにしみじみと話をしています。

「ところがな、戦争が近づいていた時代で、酒米はぜいたく品やと言われた。藤川さんが苦労して開発した山田錦は、結局、その当時は広まらなかった。」

おじいちゃんは、急にさみしそうな顔をしました。

「山田錦のよさがみとめられて、ゆうしゅうな酒米として全国的に有名になったのは、戦争が終わってからや。でもそのとき、もう藤川さんは、おらんかった。五十一才というわかさでなくなっ
たんや。酒米の開発で命をけずってしもたんかもなあ。」

そう言うとき、おじいちゃんは、まどごしに広がる一面の山田錦をじっと見つめました。

「けど、藤川さんは、なんでそんなにしてまで、開発を続けたんやろか？」

由紀がぼつりとつぶやいた言葉に、

「子どものころ、米作りの手伝いで苦勞して大きくなった人やから、苦しい生活の中、米作りにはげ
む地いきの人たちのくらしを少しでも楽にしたいと思ったんやろな。ほんまに地いきのことを考
えてはったんやな。」

おじいちゃんは、それだけ答えると、だまって席を立ちました。

由紀は、夕日に照らされてあかね色にかがやいている山田錦が、藤川さんの思いを語りかけて
いるようで、じっとまどの外を見つめていました。

その夜、由紀は、調べたことをノートにまとめました。

「自分たちの住んでいるこの地いきは、山田錦という有名な酒米の産地です。そのことは、地いきの自まんです。」

ここまで、書いたとき、ふと、夕方に見た景色と、おじいちゃんの言葉を思い出しました。

「でも、地いきの一番の自まんは、藤川さんです。」

由紀は、大きくうなずきながら、続きを書きはじめました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。